

【原著】

いわゆる「精神革命」と図書館の成立

石 橋 民 生

The so-called Spiritual Revolution and the origin of the library

Tamio Ishibashi

は じ め に

図書及び図書館史の授業といえは、ひとむかし前までは、さまざまな図書館の名前がでてくるだけの、退屈きまりない授業が多かった。最近では、このような傾向にも歯止めがかかり、理論的な構成に留意した研究が現れるようになった。^(注1)

この小論も、同様の目的意識をもって、すなわち、この科目をなんとか理論的に構成できないものか、という目的意識をもって、図書館の成立について考察したものである。図書館の成立といえは、当然歴史的な問題ということになり、われわれ図書館情報学の立場からすると、専門外ということになる。しかし、歴史研究の成果を図書館と関連付け、理論的な構成を試みることではできるはずである。

専門家に徹することによって、研究を深めることは当然重要であるが、他分野の成果に眼をむけ、積極的に他分野の研究成果をとりこむ努力をすることも必要ではあるまいか。

1. 問 題 の 提 起

この小論では、いわゆる「精神革命」論と図書館の成立との関連性をとりあげたい。というのも、一般の図書館史のテキストでは、この問題はあまり取り扱われていないように見えるからである。もっとも、西洋史の標準的な辞典をみても、「精神革命」という用語はでていないようなので、図書館史のなかにそれがでてこないといっても、それはむしろ当然のことなのであろう。

さて、図書館の成立は、古代文書館から図書館への移行という形でとらえられることが多い。この「移行」が、どのように取り扱われているか、すこし見てみることにしよう。

図書館の成立に先行するのは、文書館である。これは、メソポタミアやエジプトにおける古代都市国家のもとにある、いわば王室文庫である。このような王室文庫が成立するための条件は、都市国家、専制的な権力、文字文化の存在などである。エブラやニネヴェの遺跡の発掘のおかげで、われわれは、このような文庫の内容について、その概要を知ることができるようになった。

一方、図書館については、ギリシア都市国家における、アリストテレスやプラトンの学校などにあったものが、最初の図書館であろうと考えられているが、やはり、アレクサンドリアの図書館が古代図書館の代表的なものと考えられているといえよう。

古代の文書館から図書館への移行については、いま手元にある図書館史のテキストを開いて

みると、

「このような王室文庫には、行政的経済的な文書に加え、神話や叙事詩、秘儀や魔術の書、王室の年代記、儀式の本や祭の暦、数学や医学、建築などの書が多数生産され、集積され、文書館＝図書館から、除々に図書館へと機能分離していったと考えられる」。(注2) このように、文書館から図書館への変化は、文献の増加にともなう「機能分離」のように理解されているようである。文書館から図書館への変化は、文献の増加による自然発生的なプロセスであるように考えられている。ということは、図書の増加にともなって、収集などの業務の独立、目録のような図書館固有の業務の発生、専門家である司書の成立、などが、派生するように考えられているのである。

つぎに、文書館からの移行ということとは別に、古代を代表するアレクサンドリア図書館そのものについては、どのように理解されているのであろうか。

まず、この図書館の特質をいくつかとりあげることが行われる。どのような特質かという、図書の収集にける尋常でない努力、館長のギリシア学研究、原典批評、カリマコスのピナケス、などである。これらの特質は、ほとんどの教科書でとりあげられていることであり、共通理解されていることである。

さらに、この図書館の特質から結論づけられることであろうが、より整理された理解の仕方として、アレクサンドリア図書館が、現代の学術図書館の原型をなすものである、という定式化がある。たとえば「アレクサンドリア図書館は一举に学術図書館をつくりあげ、新しい情報の収集、生産と加工、蓄積と組織化、そして情報の提供、という学術図書館の機能の原型を示し、図書館はこうした知的再生産の場所であるとの本質を示した」。(注3)

この理解は、現在の学術図書館のさまざまな機能の起源をアレクサンドリア図書館に求めようとするものであろう。しかし、このような説明は、わからないことはないが、なにかむなしき感じを覚えざるをえないものである。このむなしき感じはどこからくるのであろうか。それは、現在の高度に発展した学術図書館の特徴である、情報収集とか蓄積と組織化、情報提供といった点の起源をただ形式的にアレクサンドリア図書館にもとめるところからくるものと思われる。

このように、古代アレクサンドリア図書館については、「移行」の論理においても、「原型」の論理においても、いわば自然主義的とでもいうか、きわめて形式的な理解が行われているようにみえるのである。そのさい、この図書館の重要な歴史的特質はただのエピソードとして取り扱われているといえよう。

ところが、この古代の専制国家からヘレニズムのアレクサンドリア図書館への変化においては、その間に、「精神革命」と呼ばれる、前8世紀から前2世紀における、人類の精神上の一大変革が介在しているのである。その内容については後述するが、要するに、この革命において人類は、個人的世界観、一定の論理による合理的な世界解釈、それらの象徴としての宗教、ギリシアにおいては特に人間文化の諸形態などを手に入れたのである。この革命において、人類はその後現代に至るまでの精神活動の枠組みともいえるべきものを樹立したのである。このような大変革を経過して、そのあと人類は、この精神革命の研究に没頭することになり、おそらく最初の出版ブームが到来し、その結果として、文書館から図書館への変革が達成されたものと解釈できるのである。

このように「精神革命」の視点をとり入れることで、はじめて古代の学術図書館の歴史的意義が理解されるようにみえる。以下、まず、いわゆる「精神革命」のアウトラインを示し、つ

いで、文書館とアレクサンドリア図書館の蔵書構成の比較検討を試みて文書館と図書館の資料の質的相違を検証し、アレクサンドリア図書館が精神革命の成果を保存するための図書館であったことを示し、おわりにその歴史的意義について考えてみることにしたい。

2. いわゆる「精神革命」について

いわゆる「精神革命」は、さいしょヤスパースの「枢軸時代」論として提唱され、最近では、伊東俊太郎によって「精神革命」論として提唱されている。孔子やブッダ、ギリシア文化において代表されるその革命は、それまでの神話時代の人類の思考法から現代までつづく人間の思考法への転換が行われたとするものである。

2.1 ヤスパースの「枢軸時代」論

ヤスパースにおいては、世界史の軸というのは、「それ以降人間が人間として存在しうるもの、すなわち高度の人間存在が生まれた時点、人間存在の形成において強烈きわまりない生産性が実現された時点」のことであり、「紀元前五〇〇年頃、八〇〇年から二〇〇年の間に発生した精神的過程にある」。ここに、「最も深い歴史の切れ目がある」、「われわれが今日に至るまで、そのような人間として生きてきたところのその人間が発生した」のである。この時代をヤスパースは「枢軸時代」と呼んでいる。^(注4)

この時代には、「驚くべき事件が集中的に起こった。シナでは孔子と老子が生まれ、シナ哲学のあらゆる方向が発生し、墨子や莊子や列子や、そのほか無数の人びとが思索した、一インドではウパニシャッドが発生し、仏陀が生まれ、懷疑論、唯物論、詭弁術や虚無主義に至るまでのあらゆる哲学的可能性が、シナと同様展開されたのである、一イランではゾロアスター教が善と悪との闘争という挑戦的な世界像を説いた、一パレスチナでは、エリアからイザイアおよびエレミアをへて、第二イザイアに至る預言者たちが出現した、一ギリシアではホメロスや哲学者たち一パルメニデス、ヘラクレイトス、プラトン一更に悲劇詩人たちや、トゥキディデスおよびアルキメデスが現れた。」このような人びとが、「シナ、インドおよび西洋において、どれもが相互に知り合うことなく、ほぼ同時的にこの数世紀間のうちに発生したのである。」^(注5)

では、この「枢軸時代」において、なにが起こったのか。それは、人間が「全体としての存在」を意識し、「人間自身ならびに人間の限界を意識」したのである。人間は「世界の恐ろしさと自己の無力さ」を経験し「根本的な問い」を発する。深淵を前にして「解脱と救済への念願」に駆られる。自己の限界を把握し、自己の最高目標を定める。人間は「自己の存在の深い根底」と「瞭々たる超在」において「無制約性」を経験する。^(注6)

この時代において「基本的範疇」が生み出され、それらを身につけて「われわれは今日いまままで思惟している」のであり、世界宗教の萌芽が生み出されたわけだが、「それに基づいて人間は今日まで生きてきた」のである。^(注7)

このような「枢軸時代」は「神話時代」に対する批判として提示される。「ギリシャ、インド、シナの哲学者や仏陀は、その決定的な洞察において非神話的であり、預言者たちは神の思想において非神話的であった。」合理的精神の側からの「神話に対する闘いが始まり、魔（デーモン）に対する一なる超越神のための闘いが…始まったのである。」^(注8)

このような変革は「精神化」とも表現できる。生の動揺、対立や二律背反が発生し、人間は自己自身への不安と同時に新たな無限の可能性に眼を開かれる。シナにおける隠者や遍歴思想

家、インドにおける禁欲行者、イスラエルにおける預言者たち、これらの人びとは哲学者であり、「全世界に内面的に対峙する」ことによって、「自己の中に根源を見だし、そこから自己自身と世界を見くだした」。(注9)

2.2 伊東俊太郎の「精神革命」論

伊東の「精神革命」論は、以上のヤスパースの「枢軸時代」論をさらに展開したものである。伊東によれば、この時代に、「神話的呪術の世界が克服され、日常経験を越えた普遍性の追及が行なわれ、世界全体の統一的合理的解釈が追求された。」とされる。世界の主要な4地域において、それぞれ別々にこのような精神上の変革が行われたことについての事実認識はヤスパースと同じであるので、くりかえしは避けて、以下、伊東によってこの精神革命の「特質」と考えられていることを要約しよう。(注10)

(1) 4地域における相違点

ギリシア思想はロゴスの理論的であり、インド思想は彼岸の形而上的であり、中国思想は此岸的实践的であり、イスラエル思想は超越的宗教的である。

(2) 個人の思考の登場

それ以前の社会のもつ集団の思想（バビロニアのマルドゥク信仰、エジプトのオシリス信仰、殷の天帝信仰）からの変化をとげている。

(3) 思想の合理性

神話的世界の思惟方式（アニミズム、トーテミズム、マナイズム、シャーマニズムなどの八百万の神々の世界）は、精神革命に先行する「都市革命」に対応するものである。精神革命においては、このような思惟方式にかわり、人間理性にもとづく世界の合理的把握が開始されたのである。

(4) 普遍的絶対者の志向

「そこから世界を統一的にみなおし、そのなかで人間のあり方を自覚する」普遍的絶対者への志向が、精神革命の特徴の1つであるが、これは、各地域別に以下のようにまとめられている。

① ギリシア

さいしよ、イオニアの哲学者によって、森羅万象がそれからなり、そこへと帰一するものとしての元素（空気、水、原子など）が自然の原理として追求された。

ついで、ソクラテス、プラトンによって、このような考え方に対する批判が行われた。元素は、ものの素材、質料にすぎず、ものを真にそのものたらしめるのは、そのものの本質であるアイデアであるとした。アイデアはギリシアのロゴスの理論的思考に対応するものであり、ギリシア人の認識方法としての観照（テオリア）にみあうものでもある。

ついで、アリストテレスにより、形相（けいそう）が追求された。これは、ギリシア思想において、究極的にもとめられた普遍者で、アイデアを受け継いだものである。

② インド

インドにおいては、この普遍的絶対者に相当するものはダルマ（法）である。

仏教では、煩悩をふき消した解脱の境地として、ニルヴァーナ（涅槃ねはん）が追求されたが、これは、インド思想の彼岸の形而上的な性格にみあっている。

ギリシアは、真の認識に向かう観照的態度であるが、インドは悟りに向かう思弁的態度である。

③ 中国

中国における究極的な絶対者は「道」である。これは、もと神話的呪術的な天の概念を人間的な原理として内在化し倫理化したものである。学派によって、主観的な仁であったり、客観的な礼であったり、客観性をすすめた法であったり、また、そのような出世間的なものでなく、いっさいの世事を否定した無為自然であったりする。

儒教では、礼と仁が重要になる。しかし、形式的制度的な礼も、仁（思いやり、慈しみ）がなければ無意味になるので、仁が優先する。したがって、仁が究極的なものになる。

「道」あるいは「仁」は中国思想の此岸の処世的な性格に対応している。中国においては、個人や国家のよき現世的実践が問題であった。

④ イスラエル

唯一神ヤハウェとの契約にもとづく律法（トーラー）は、超越的な神の人間にたいする命令である。旧約の預言者たちの運動は、この律法の固定化、儀式化に反対することが基調になっている。この系譜は、キリストにつながり、律法は愛にかえられる。

2.3 まとめ

精神革命とは、このように、世界の各地域において、およそ紀元前800年から200年のあいだに進行したところの変革であり、都市国家から古代広域国家への世界のひろがりのなかで、激しい論争を経て、集約され昇華し、記憶、記録されたところ思想的変革である。とくに、ギリシアにおいては、その後の人類の文化の諸形式が発明され、人類の精神的枠組みが設定されたところの変革である。

それは、現代に生きるわれわれさえも、宗教や哲学の問題を考えるさいには、いつもそこに立ち戻り、どんな風であったかを確認めようとし、行われた探求の方向性を確認しようとし、その水準まで到達できない無力感を味わい、尊敬を新たにするような、そのような精神的燃焼であった。

さらに、ギリシアにおいては、自然科学の起源となるような業績が提供されている。この業績は、ヘレニズム、アラビアを経て12世紀にヨーロッパに逆輸入され、17世紀科学革命の原点になったものである。

すなわち、宗教思想や哲学の面でも、科学の面でも、後世の人びとはこれらの先人の業績に対して、負っているものはきわめて大きいものがある。そのことは、今日においても、たとえば宗教や哲学の分野では、精神革命時代の遺産に対して、大量の研究や注釈などが発表されつづけていることをみれば明らかであろう。

3. メソポタミア文書館とアレクサンドリア図書館の蔵書構成

ここでは、メソポタミアの王室文庫（文書館）とアレクサンドリア図書館の目録とを、比較することによって、その変化の様相をみることにしよう。

3.1 メソポタミア文書館の資料構成

3.1.1 資料構成

ボテロによれば、メソポタミア文書館の資料構成は以下のようである。^(注11)

(1) 50万個の粘土板文書の3/4は日常的文書

財産リスト、倉庫や帳場の収入や支出の計算書、値段表、国家間の条約、個人間の契約

(売買、金の貸し借りと担保、結婚や離婚、財産贈与、養子縁組、徒弟制度、手紙、所有権の証書)。

(2) 文学（書き手の思想や感情を伝える文書群）

① 宗教的なもの

神話、超自然的存在の序列リスト、神への讃歌と祈祷文、公的な祭祀儀礼と個人的祓魔（ふつま）儀礼（魔物の仕業と考えられた日常的不幸を神々がやわらげてくれる効果がある祈祷・秘儀）。

② 王に関するもの

勅令、歴史年代記、叙事詩、英雄物語、政治的パンフレット。

③ 文学

当時唯一の読み書き能力をもつ集団である書記集団の作品群。描写文学、風刺文学、寓話、人物論、エッセイ、文学論争、ことわざ、処世論、語彙分類リスト、2語辞書（シュメール／アッカド）、百科全書（およそ1万項目の見出しのもとに物質界のあらゆるものが列挙されている）、カタログ、説明書（数学、文法、法学、医学、ト占学）、占星術の記録・計算、各種の製造技術（色ガラス、薫香、染料、飲料）、料理の手引書。

3.1.2 分析

以上のような文書館の資料構成から想定されることといえば、つぎのようなことになるであろうか。

(1) 資料の中心は文書であること

まず、文書のうち3／4は日常的な文書であることには、どんな意味があるのだろうか。人類史上はじめての文明社会である古代都市国家の前提として、大規模灌漑工事の達成による生産力の向上、工事の組織による王権の発生、文字を扱える官僚による実務、などがある。官僚などの支配層による社会運営のもとで、一定の市民生活が存在したと考えられる。そのような社会にあって、最重要課題の1つは文書管理であったはずであり、以上の資料構成は、このような都市国家の実態をよく示している。

(2) 社会的儀礼

宗教的文書また王に関する文書は、社会生活上のさまざまな習俗や儀礼および社会的意思決定の様相を表現している。それは高度に緊張した、社会生活のあらゆる細部にわたる、社会的考察の集大成とみることができる。しかし、それはまだ儀礼であり、意思決定のスタイルを示すものであり、個人による合理的な思想表明とか、そういったものではない。

(3) 文学

注目されるのは、書記集団の作品群であり、文学やエッセイ、辞書や百科全書、数学や医学の説明書が含まれている。これらの文書は、一定の「個人的」生活の存在や自由な思想表現、また言語生活の集成や科学的考察の萌芽を表現している。これらの作品群の存在は、初期文明社会における文学的・言語的・科学的思想活動の存在を証明している。しかし、このような思想活動と、精神革命における思想活動（たとえば個人による世界観の表明であるとか、理性による世界の合理的把握であるとか、あるいは普遍的絶対者の追求であるとか、あるいは文献の批判であるとか）との間には、やはり大きな断絶があり、革命的な飛躍が必要だったのではあるまいか。

3.2 アレクサンドリア図書館の蔵書構成

『図書館情報学用語辞典』によって、アレクサンドリア図書館をみると、「紀元前3世紀初頭、プトレマイオス朝エジプトの国王によって首都アレクサンドリアに作られた図書館。古代ギリシアの文献を核に一大コレクションを形成、姉妹機関ムセイオンとともに、ヘレニズム文化の成果を集大成し、言語学、医学等の諸学の発展に寄与した。蔵書は著者名等に基づく分類により管理されていたとされ、カリマコス（Callimachus 前305？－前240？）により解題書誌『ピナケス』も作成された…」とある。^(注12)

今日では、復元の努力は行われているものの、カリマコスの目録が失われているので、われわれには、アレクサンドリアの図書館の蔵書がいかなるものであったか、直接確かめるすべはない。ここでは、粟野頼之祐の研究をてがかりに、それを推定してゆくことにしたい。^(注13)

(1) 文献学

まず、アレクサンドリア図書館の文献学であるが、これは、アリストテレスのリュケイオン学園の流れをくむデメトリオスやスッラトンによる学風の移植にはじまるものである。その後、初代図書館長のゼノドトスをはじめとするホメロス以下の研究が行われ、カリマコスによるその継承と彼の門下生による展開がなされた。ここでは、主にギリシア作家の、多数の手書きのテキストから、より原型に近いものを文献批判をとおして確定してゆくという作業が行われたわけである。そのさい、著者の数はある程度限られたものになる。現代の図書館なら、多数の著者の異なる著作をいかに多く収集するか、ということが問題となるが、ここでは、限られた作家のより正確なテキストをいかに追求するかということが重要となるのである。

(2) 「アレクサンドリアの古典作家表」

これは、18世紀の中ごろDavid Ruhnkenによって、「クワスリン文庫の写本」研究から発見されたもので、その内容は重要なギリシア古典作家のリストである。粟野頼之祐によれば、このリストは、「カリマコスの門下生であるアリストファネスとその弟子アリスタルコス…が、文芸学研究入門者のために選んだ主要なギリシア古典作家の一覧表」であろうということになっている。この表は、したがって、カリマコスの目録中の作家のリストと重なる部分が多いと考えられる。そして、カリマコスの作家リストと重なる部分が多いということは、図書館の蔵書構成の主要部分を構成していた作家であると推定することができるのではあるまいか。

(3) カリマコスの目録の分類

前項のアレクサンドリア古典作家表は、カリマコスの目録の分類の研究史のうえでも、重要な役割を果たしたものである。Blomfield, Wachsmuth, Nietzsche, Schmidt等は、この「古典作家表」をも参考にして、カリマコスの目録の復元に努力したわけであるが、その研究を踏まえたうえで、粟野の到達した結論によれば、カリマコスの目録の分類は以下のとおりである。

第1類 詩文書

- 第1綱 叙事詩篇目録
- 第2綱 悲歌調詩篇目録
- 第3綱 短歌調詩篇目録
- 第4綱 歌謡調詩篇目録
- 第5綱 悲劇篇目録

- 第6綱 喜劇篇目録
- 第2類
 - 第1綱 法律篇目録
 - 第2綱 哲学篇目録
 - 第3綱 修辞学篇目録
 - 第4綱 史学篇目録
 - 第5綱 医学篇目録
 - 第6綱 雑篇目録

この分類綱目と先の「古典作家表」とを統合すれば、それは、アレクサンドリア図書館の蔵書目録に近似したものになると推定することができるのではあるまいか。

以上の、いわば傍証によって、アレクサンドリアの蔵書構成の主要部分がギリシア文明の著作家たちのものであったことはまず疑いないものに思われる。^(注14)

4. アレクサンドリア図書館の歴史的役割

アレクサンドリア図書館の歴史的役割をまとめれば、人類のはじめて経験する精神革命の成果を、収集し、保存し、原典批評によって研究し、テキストを定め、今日にいたるまで継承されている精神文化の基本形を後世に伝えた、ということになる。

(1) 学術的性格

学術的といっても、その意味は、文書館の蔵書構成と比較したうえでのものでなければならない。それは、ギリシアの精神革命の成果を研究、保存するための図書館だったのである。エブラやニネヴェの文書館が、いわば行政文書を保存する目的の機関であったのに比較すると、アレクサンドリア図書館は、ギリシア文化の重要性を理解し、研究成果の収集保存という目的に特化された図書館であったといえる。

(2) 国家経営

アレクサンドリア図書館は、いわば、ヘレニズムの国家事業であった。それは、メソポタミアの都市国家ではなくヘレニズム文明の国際的広域国家である。このような国家が、国力の充実のために、国家の総力をかけて図書を収集し、出版し、研究する事業を行ったのである。このことは、ギリシア文化の衝撃の強力であったことを示すと同時に、その保存にかけられる国家意思の強さをも示している。

(3) ギリシア文化の稀有であること

古代文書館の蔵書構成が、本質的に行政的ないし神話적であるのに比して、アレクサンドリアの蔵書構成は学術的であり、その内容はギリシア文化である。後世の人びとが、それを出発点とし、研究の基礎とし、つねに立ち返って考察対象とするところのテキストである。このような文化は、いつどんな時代にもあるというものではなく、特定の時代に、まれな固有の環境のもとに短期間に集中的に現れたものであり、再現することのないものである。ギリシア文化のような稀有の文化的爆発のあとにつづく後世の人びとの仕事としては、ある程度の展開や発展はあるとしても、主として保存とか研究ということにならざるをえない。

(4) 出版物の収集

精神革命は、おそらく人類史でさいしょの出版ブームを引き起こしたものと考えられる。アレクサンドリア図書館では50万巻の図書を収集したと伝えられる。しかし、このような古

代文化も、一方では戦乱のため、他方では、パピルスの材質のために、多くは失われる運命にあった。箕輪は、文献の伝存率をつぎのように推定している。^(注15)

判明している作品数と伝存された作品数（カッコ）

アイスキュロス	70（7）
ソポクレス	113（7）
エウリピデス	92（18）
アリストパネス	43（11）

すなわち、残存の割合はおよそ1～2%とみられ、伝存率の低い理由として、パピルスの耐久性に問題があり、書き写しが行なわれないと、劣化が進み回復不可能であることを挙げている。

(5) 原典批評

さきに引用した粟野は、アレクサンドリアの研究成果や方法が、西洋古典学の基礎のひとつ（それも、もっとも重要な）であることを予想している。中世から近代にかけて、西洋のギリシア研究は、いわば、アレクサンドリア図書館で研究されたテキストにもとづいて行われ、作家の伝記は、カリマコスのピケナスの記述にもとづくものが多いのである。

アレクサンドリア図書館で行われた原点批評は、特定の図書館でたまたま行われたものだったのではなく、それ以後、中世から近代に至る、ヨーロッパ修道院やイスラムの知識の館、東ローマ帝国で行われた出版活動（写本による）の、標準的なテキストを提供するという重要な歴史的役割を果たしたのである。

(6) 西洋12世紀ルネサンスへの継承

アレクサンドリア図書館で蓄積された古代ギリシア文化の著作物は、戦乱やパピルスの材質の脆弱さにより、その多くは失われたが、一部は、主としてイスラムの図書館によって保存され、書写されて、今度は逆にスペインやコルシカ経由でヨーロッパに逆輸入され、ヨーロッパの12世紀ルネサンスさらには15世紀ルネサンスから17世紀の科学革命につながってゆく。たとえば、コペルニクスが天動説を着想するにいたるためには、どのような条件が必要か考えてみるとよい。いくら天才であっても、なにもないところにはなにも生まれはしない。必要条件としては、古代ギリシアの天文学（プトレマイオス）のテキスト（『アルマゲスト』）と、活字によるその普及ということになるのではあるまいか。コペルニクスは、古代天文学を研究し批判することによってだけ、自身の地動説を構想することができたのである。プトレマイオスのデータと天文理論（天動説）がないとすると、コペルニクスはそのあやまりを発見することもできないし、地動説を構想することも不可能だったのではあるまいか。^(注16)

お わ り に

以上、精神革命という歴史的事実と図書館の成立という問題を組み合わせて考えてみた。はじめに述べたように、精神革命という用語は、まだ歴史の辞典には登場していない。比較文明史学の研究者たちによって提唱されているだけである。それでも、精神革命を導入することで、古代の図書館の成立という問題を、これまでとはちがった背景のもとに見直すという目的は一応果たせたのではないかと思う。

注と引用文献

- (1) たとえば、藤野幸雄「図書館史・総説」（勉強出版、1999）や箕輪成男の一連の著述など。
- (2) 寺田光孝編「図書及び図書館史」、樹村房、1999、p 11。
- (3) 同書、p 17。
- (4) ヤスパース「歴史の起源と目標」、理想社、1964、p 22。
- (5) 同書、p 22－23。
- (6) 同書、p 23。
- (7) 同書、p 23－24。
- (8) 同書、p 24。
- (9) 同書、p 25。
- (10) 伊東俊太郎編著「都市と古代文明の成立」、講談社、1974、p 224－241。
- (11) ジャン・ボテロ「メソポタミア：文字・理性・神々」、法政大学出版局、1998、p 32以下。
- (12) 図書館情報学用語辞典、第3版、丸善、2007、p 6。
- (13) 粟野頼之祐「アレクサンドリア図書館目録の研究」、『関西学院史学』、1－2 および 5 号、1952－1959。
- (14) もっとも、アレクサンドリア図書館の蔵書がギリシアの著作だけだったわけではない。ギリシア文化以外の資料としては、有名な「七十人訳聖書」がある。
- (15) 箕輪成雄「パピルスが伝えた文明」、出版ニュース社、2002、p 66。
- (16) E. L. アイゼンステイン「印刷革命」、みすず書房、1987、p 224以下。

—平成22年10月29日 受理—